
変態超能力をプレゼント

ヒッツカラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態超能力をプレゼント

【Nコード】

N2845Y

【作者名】

ヒイツツカラルド

【あらすじ】

もしも、変態になるけど超能力が貰えたら、君は貰いますか？

プロローグ

すべての授業が終わり、帰宅部の生徒たちが下駄箱の並んだ玄関から見える正門を目指して歩いて行く。

その横で運動部の生徒たちが、青春を費やして取り込む各競技に爽やかな汗を流していた。

県立蓬松高校の、放課後の景色である。

「なあ、龍」

「ん」

二人並んで歩く男子生徒。

背の高い生徒が、自分よりも背の低い生徒に話しかけた。

声を掛けられた生徒は、視線を少し上に向けながら返事をした。

背が低いと述べても175センチは有る。

背の高い生徒の方が、大き過ぎるのだ。

おそらくのところ190センチは有るだろう。

「なあ、暇ならカラオケでも行かないか？」

「え、またかよ……」

嫌そうな顔で言葉を返す生徒の肩に、長身の生徒が腕を回す。

「いいじゃあねえかよ、行こうぜ」

「どうせお前の歌の練習だろ、一人で行けよ」

「連れね〜こと言うなよな〜」

長身の生徒は、身長は高いが細身である。

髪型は坊主頭に近いが金髪に染められており、ブレザーの制服もだらしなく着こなしていた。

若干だがチャライ。

彼の夢は、ミュージシャンに成る事らしい。

しかし、顔は整っている方だが、メロディーは整っていない。

「おごりだったらいいよ。だって俺、今月の小遣い、あと1500円しか残ってないんだもん」

今月が始まって今日は10日目である。

月の小遣いは5000円だが、貰って直ぐに無駄使いを友好的にしてみましたのだ。

暫くは糊口をしのがなくてはならない。

「おごる金が俺に有ると思うか、龍」

「じゃあ、ひとりで行けよ。俺は一昨日買いまくった本を、家でゆつくり読んでいるからよ」

実のところ、欲しかった本は買いきれてない。

「あ……………」

今度は長身の生徒が嫌な顔を浮かべる。

「またオカルト雑誌か？」

「何か文句有るか。俺が世界の不思議に興味を抱いて何が悪い？」

「そんなことだから女にモテないんだよ。龍はよ」

龍と呼ばれる少年には彼女が居ない。

今年で高校二年生になる。歳は17だが、一度も彼女が出来たことがない。

顔は悪くは無い。だが、平凡な顔をしている。

成績も悪くは無い。だが、優秀な科目も無い。

スタイルも悪くは無い。だが、オシャレでも無い。

運動神経も悪くない。だが、体育の授業でも目立ったことは無い。

性格も控えめなところがあって、自分から前へ前へといった感じは無い。

まさに、平凡な高校生である。

その上、異性の前だとやたらと緊張してしまって、会話が上手く出来なくなる。

だから、女子にもモテない。

名前は、政所まつたけこうじ 龍一りゅういち。

親しい友達には『龍』と呼ばれている。語尾を延ばすのだ。

龍一の一の字を、語尾を延ばす意味合いに使っている。

彼はファミリーネームで呼ばれる事を嫌っていた。

小さな頃から『まんどころ』と言う名前の響きのせいで、随分と揶揄された事があるからだ。

長身の生徒の名前は、小笠原おがさわら 卓巳たくみ。

龍一とは、高校に入学してから知り合った友達であるが、今では一番の親友と呼べる仲であった。

一年二年と二人は同じクラスである。

ちなみに彼には彼女が居る。

二人は何気ない日常の会話をダラダラと交わしながら駅前を目指して歩いていった。

田舎でも都会でもない町並み。

大通りには車が犇めき合って走り、背高い近代ビルが立ち並んでいる。

しかし、ビルの脇に在る小道に入って行けば、100メートルも進まないうちに住宅街に変わる。

一気に下町風景に変わってしまう。

凶悪な犯罪も少ない平和な町であった。

卓巳の自宅は、電車に乗って三駅越えた先にある。

龍一の家は、駅を越えた裏側の更に20分ぐらい歩いた所にあった。

まだ20年ものローンが残っているが、父親自慢の一戸建てである。

両親と姉での四人暮らしであった。

「じゃあな、龍。また明日。」

「またな。」

二人は駅前で別れる。

卓巳は駅の改札口を目指して行くが、龍一は駅前に在る本屋へと足を向けた。

今月の小遣いで買えなかったオカルト本を立ち読みする為であった。

龍一が本屋の前に到着すると、不思議そうな顔で足を止めた。

五階建てのビル。

一階二階は、すべて本屋だが、三階テナントには喫茶店と美容院が入っている。

四階五階は、会社事務所が幾つか入っていた。

本屋の名前は『三日月堂』。

このビルの所有者は、この三日月堂の店長の父親である。

いつも龍一は、この本屋で本を買う。

ここで手に入らない本は、顔見知りで仲の良い店長にお願いすると、取り寄せてくれる。

しかも、本が届くと携帯電話にメールで知らせてくれるし、お金がない時は来月の小遣いまで待ってもくれる。

だから龍一は、インターネットで本だけは買ったことが無かった。

それどころかここ数年は、この本や以外で本を買ったことが無い。

この通いなれた本屋ビルの前で、龍一が足を止めた理由は、本屋の入り口から離れたビルの端に、小さな机に行灯と水晶玉を置いて椅子に腰掛けた老婆の姿があったからだ。

小さな机の前には、A4サイズの紙で『占い、五千元』と書かれていた。

「占い師か……」

とても気に成る老婆であった。

矮躯の背を丸めて、ただじつと椅子に腰掛けている。

その顔は皺だらけで頭も白髪であった。

老婆の前を、幾人もの歩行者が過ぎていくが、誰もが老婆に視線すら向けずに無視していた。

龍一の足は、自然と老婆の方へと進んでいた。

「占いですか？」

老婆に声を掛ける龍一。

声を掛けてから自分でも驚いた。

どちらかといえば人見知りで内気な自分が、進んで見ず知らずの人に声を掛けるとは。

上から見下ろすような龍一を老婆がゆっくりとした動きで見上げた。細い目から僅かに黒目が見える。

「お客様じゃあないよねえ」

老婆が言った。

龍一は、思わず「うん」と一言返す。

客では無い。

1500円しか持っていない。

5000円は、月の小遣いに匹敵する金額だ。

幾らオカルト好きでも、占いなんかに一月分の小遣いは出せない。

では、何故、自分は、この老婆の前に立って、声まで掛けてしまったのだらうと疑問に思った。

その疑問に自分で回答を出すよりも早く、老婆が話しを続けて来る。

老婆の声は、乾いているが穏やかで優しくかった。

「じゃあ、欲しいのかい？」

「欲しい？」

「違うのかい？」

何かくれると言っただろうか。龍一は、僅かに首を傾げた。

「貴方は、超能力が欲しいのですよ？」

「えっ？」

はっとする龍一。

唐突な言葉だった。

超能力とは、やはりあの超能力の事だろう。

サイコキネシスとか、テレパシーとか、テレポーテーションとかだろう。

何故に占い師の老婆が、唐突にそのような事を言い出したのか理解が出来なかった。

だが、龍一の心にイカヅチが落ちたような衝撃が走る。

超能力とは、オカルト好きの龍一が欲して成らない夢の能力であった。

家の勉強机の上で、何度鉛筆を手で振れずに動かそうと念じた事か。

授業中、隣の列の四つ前に座る女子生徒に、振り向いてくれとテレパシーを送った事か。

放課後、女子新体操部の更衣室を遠目に、分厚いコンクリート壁を透視しようと試みた事か。

だが、凡人の中の凡人である龍一には、そのような超能力が備わっていた訳でもなく、幾ら好きでオカルト本を読み漁ったとしても、備わる訳でもなく、ただ悔しい涙を飲み続けてきた。

欲しい。

龍一は、年中欲しいと懇願していた。

それを。

それを、この老婆が見破ったのである。

一瞬、龍一の脳裏に占い師とは恐ろしい心眼を会得しているのかと、脅威にも似た尊敬の念を抱かせた。

「超能力、要らないの？」

「要ります……」

老婆の言葉に龍一は、ポロリと本音を返してしまう。

「じゃあ、あげてもいいわよ」

「えっ!?!」

心臓が止まりそうな程に仰天した。

だが、同時に警戒心も高まる。詐欺かと疑う。

「差し上げてもいいけど、どんな超能力が貴方に備わるか、私にも分らないわよ」

頭が混乱する龍一。

とても疑わしい話だが、超能力が欲しいのは、子供の頃からの夢である。

怪しいが、この場を離れられない。

「お金は、持っていませんよ……」

つつい口に出た言葉であったが、老婆は皺だらけの顔を微笑まして「お金は要らないよ」と言った。

「じゃあ、何か他の物を要求するとか、何か条件でもあるのですか？」

「別に何も要求はしないわよ。しいて言うなら、『恋』かしらねえ」

老婆は言いながら頬を赤らめ横を向く。

ちよつとキモイ。

「でも、条件はあるわよ」

視線を龍一に戻した老婆が言った。

やはり何かあるようだ。再び警戒を強める。

「私は誰かに超能力を上げられるけど、どんな能力が目覚めるかは指定できないの」

「選べない？ サイコキネシスとかテレパシーとか、どんな能力が備わるか分らないと」

「難しい事は分ないわ。でも、様々な個性的な能力が生まれるわ。私の超能力は、他人の心にある未知の扉を開く能力なの。だから、上げると言うより、鍵を開けるような感じかしら」

この人も超能力者なのかと龍一は驚いた。

「鍵を開く……。人間のブラックボックスを開くように……」

呟くように言った龍一の言葉に老婆が反応する。

「そうそう、昔の事だけど、私が超能力をあげた人が、私の能力を『パンドラキー』とかと呼んでいたかしら」

パンドラキー。

パンドラの箱を開ける鍵を意味する能力なのだろう。

心のブラックボックスを開けて、超能力者として目覚めさせる能力。

この老婆は、今まで何人もの超能力者を生み出してきたと言うのだ

ろうか。

だが、凡人の中の凡人である龍一には、そのような超能力が備わっていた訳でもなく、幾ら好きでオカルト本を読み漁ったとしても、備わる訳でもなく、ただ悔しい涙を飲み続けてきた。

欲しい。

龍一は、年中欲しいと懇願していた。

それを。

それを、この老婆が見破ったのである。

一瞬、龍一の脳裏に占い師とは恐ろしい心眼を会得しているのかと、脅威にも似た尊敬の念を抱かせた。

「超能力、要らないの？」

「要ります……」

老婆の言葉に龍一は、ポロリと本音を返してしまう。

「じゃあ、あげてもいいわよ」

「えっ!？」

心臓が止まりそうな程に仰天した。

だが、同時に警戒心も高まる。詐欺かと疑う。

「差し上げてもいいけど、どんな超能力が貴方に備わるか、私にも分らないわよ」

頭が混乱する龍一。

とても疑わしい話だが、超能力が欲しいのは、子供の頃からの夢である。

怪しいが、この場を離れられない。

「お金は、持っていませんよ……」

つつい口に出た言葉であったが、老婆は皺だらけの顔を微笑まして「お金は要らないよ」と言った。

「じゃあ、何か他の物を要求するとか、何か条件でもあるのですか？」

「別に何も要求はしないわよ。しいて言うなら、『恋』かしらねえ」

老婆は言いながら頬を赤らめ横を向く。

ちよっとキモイ。

「でも、条件はあるわよ」

視線を龍一に戻した老婆が言った。

やはり何かあるようだ。再び警戒を強める。

「私は誰かに超能力を上げられるけど、どんな能力が目覚めるかは指定できないの」

「選べない？ サイコキネシスとかテレパシーとか、どんな能力が備わるかわらないと」

「難しい事は分ないわ。でも、様々な個性的な能力が生まれるわ。私の超能力は、他人の心にある未知の扉を開く能力なの。だから、上げると言うより、鍵を開けるような感じかしら」

この人も超能力者なのかと龍一は驚いた。

「鍵を開く……。人間のブラックボックスを開くように……」

呟くように言った龍一の言葉に老婆が反応する。

「そうそう、昔の事だけど、私が超能力をあげた人が、私の能力を『パンドラキー』とかと呼んでいたかしら」

パンドラキー。

パンドラの箱を開ける鍵を意味する能力なのだろう。

心のブラックボックスを開けて、超能力者として目覚めさせる能力。

この老婆は、今まで何人もの超能力者を生み出してきたと言うのだろうか。

「まだ、条件はあるわよ」

「ほかにも？」

この時点で龍一の警戒心は、好奇心に飲まれていた。

条件と言うのが、超能力を貰う為の代償でなく、貰った後の事を話しているからであった。

棚から牡丹餅状態の話に、目が輝き始めている。

「超能力を得た人は、仲間内では異能者と呼び合っわ」

超能力者が他にも沢山居るような言いようだった。

更に老婆は話し続ける。

「異能者になると、二つだけ性格が変わるのよ」

「性格が変わるのですか……」

それは何だか嫌だと思う。

「一つ目は、異能者は、異能者同士でしか恋愛関係に発展できなくなるのよ」

「異能者は、異能者しか愛せない？」

「そっなのよ……」

そう言い老婆は俯き加減で溜息をついた。

恋愛話ならば、龍一には関係が無い。

恋人も居ないし、今後出来る気配もない。

17歳にして半ば諦めムードである。

龍一は、一つ目の性格変化を何気なく無視した。

「二つ目は？」

「二つ目はね、新しい趣味のようなものにも目覚めちゃうのよ」

「新しい趣味ですか……」

何を言いたいのかわからない。

「そう、今まで好きでもなんでもなかったものが、急に大好きになっちゃうの」

「なるほど。本当に新しい趣味が芽生えてしまうのですね」

「そうそう、急に服のセンスが変わったり、味覚が変化したりするの。酷い人は、ウンコが大好きに成ったとか、そんな例もあるわ」

「ちょっと待って下さい！　ウンコが好きになるって問題でしょ！」

服のセンスが変わるぐらいは良いが、ウンコが好きになるは、文化

人としてダメダメだろうと声を荒立てる。

「聞いた話だと、ウンコの写真を取りまくっているらしいわよ」

「じゃ、写真ですか……」

味覚が変わるの後にウンコの話がでたので、食するのかと勘違いしていた龍一は、誤解があったのだと分かり僅かに安堵した。

「この二つの条件が飲めるのならば、貴方を異能者にしてあげるわよ」

「無料で？」

「ええ、タダだよ」

腕を組みながら龍一は、親指と人差し指で自分の顎を摘まんて考えた。

超能力は、とても欲しい。

子供の頃から懇願して止まなかった夢だ。

しかし、ペナルティーが怖い。

どのような超能力を獲得できるか分らないのに、変態的趣味が備わるのも考えものだ。

素晴らしい超能力を得られるならば、多少の変態趣味に目覚めても我慢できよう。

だが、なんの役にもたたないゴミのような能力を授かったうえに、ウンコを愛でるような趣味を好むようになった、それこそ人生の終末を遂げてしまう。

実に悩ましい。

この天秤のバランスは、博打の要素が強い。

龍一は、喉を唸らせ悩みに悩んだが、やはり結論は一つだった。

それでも超能力が欲しい。

龍一の覚悟が決まる。

少年が老婆に向って深々と頭を下げた。

「僕に、超能力を下さい。僕を異能者にしてください！」

礼儀を正した隆一に白髪の老婆が微笑む。

「後悔しないわね？」

「はい！」

頭を下げたまま大きく返事を返す。

その頭に老婆が皺だらけの細い両腕を伸ばす。

軽く両手を頭に乗せた。

「じゃあ、貴方は今から私たちの仲間よ。今日から異能者よ」

龍一の頭の中で、何かカチツと音がした。

鼓膜から伝わって来た音でない。

心の中で鳴った音のようだった。

それと同時に、脳内が白く染まる。

視界も白く染まった。

すべてが純白に染まる。

まるで白紙のキャンバスのようだった。

そこに何かが現れた。

遠くから何かが飛んで来る。

クネクネと長い体を呻らせて飛んで来る。

蛇じゃない。

龍だ。

ドラゴンだ。

「これが、僕の超能力か……」

飛んで来る飛龍は、短い両腕に何かを抱えている。

よく見れば、ドラゴンの表情は歡喜に溢れていた。

目を凝らす少年。

その上空をドラゴンが渦を巻くように飛び回ると、抱えた何かをばら撒いた。

何かがフワフワと沢山落ちて来る。

「こ、これは!?!」

白、黒、赤、ピンクに水色。

それは、色取り取りのパンツ。

乙女の羽衣。

女性物の下着だった。

龍一は、綿雪のように降り注いでくる女性用の下着の中、ヨン様もビックリなほどの笑みで、両腕を広げながら微笑んでいた。

「パ、パンツだお〜」

言葉の語尾に、ハートマークが咲いている。

こうして少年の新しい変態物語が始まった。

変態異能者物語のスタートである。

ドラゴンとパンツの謎

頭の中の霧が、晴れて行く。

耳に町の雑音が蘇りだした。

目の前には、あの婆さんが居た。

椅子に腰掛けたまま呆け眼の龍一を、満面の笑みで見上げている。

「い、いまのは……」

純白の空間に現れたドラゴン。

そして、パンツの雨。

この婆さんが、本当に超能力をプレゼントしてくれたのならば、あれは幻覚でないだろう。

自分で見たのだ。確信できる。

ドラゴンとパンツ。おそらくあれは、龍一が授かった超能力と、新たな趣味の片鱗。

ドラゴンはカッコ良かった。

しかし降り注ぐ沢山のパンツは……。

それを思い出した龍一の顔が、不安に濁る。

「どっかしら？」

龍一を下から見上げる老婆が言った。

自分の両掌を眺める龍一だったが、何か変化があったようには感じられなかった。

「超能力が、本当に授かったのでしょうか？」

「そうじゃなくて」

首を傾げる龍一。

「な、何がですか？」

「私を見て、トキメキを感じないかしら？」

「ときめき……ですか……？」

苦笑いと共に訊き直す。

そんなもの、微々たりとも感じる訳が無い。

しかし老婆は、何かを期待するような眼差しで龍一を見上げていた。

「そう、トキメキよ。私を見て、キュンと来ない？」

「きませんが……」

龍一が素直に答えると、老婆の顔がどんよりと曇りだす。

肩から力が削げ落ち落胆に沈む様子がよく分った。

「またハズレなのね。今度こそ上手く行けばと思ったのに……」

そう呟きながら椅子から立ち上がる老婆は、そそくさと後片付けを始めた。

椅子から立っても、座っている時と背丈が変わらない。かなり矮躯のようだ。

椅子や机を折りたたみ水晶や行灯を鞆の中に仕舞いだした。

「ど、どうしたんですか……」

「今日はもうおしまい。疲れたから帰るのよ」

後片付けを終えた老婆は、荷物を背負うと駅の方に歩き出した。

龍一は、とぼとぼと歩く老婆の後姿を見送る。

老婆も疲れたと言っていたが、何故か龍一も疲労感を強く感じていた。

体全身が重いし、頭にまだ靄が掛かっている気分が続いていた。

ガラス越しに本屋の店内を覗きこむ。

三日月堂の店長が、本棚の整理をしているのが見えた。

「今日はやめておこうか……」

立ち読みが目的で三日月堂に立ち寄る積りだったが、ここまで来て気分が乗らない。

龍一は、踵を返して駅を越える為の跨線橋を目指す。

帰宅の路に着くまでの道中、龍一はずっと考えていた。

自分が得た超能力とは、一体なんだろう。

老婆曰く、どのような能力に目覚めるかは分らないとの事だった。

サイコキネシスやテレキネスのような、オカルトでもポピラーなものだろうか。

それとも厨二ばい個性的な能力だろうか。

スタンドやミュータントのような。

もしかしたら車輪眼とかギアスとかは……ないだろう。

それに強い弱い、使える使えないも大きな問題だ。

せつかく得た超能力でも、えつぴつを転がす程度のサイコキネシスや、長年連れ添った夫婦が「あれ取ってくれ」「お醤油ですね」「みたいなテレキネスではガツカリにも程がある。

だが希望は、白昼夢で見たドラゴンだろう。

きっと自分に目覚めた超能力は、ドラゴンに関係した能力だろう。

しかし一方で不安なのは、降り注いできたパンツである。
新しい趣味が、同時に不安を扇いだ。

「パンツか……」

呟きながら視線が、近くを歩く女性に向けられた。

どこかの会社員であろうか。二十歳ぐらいの女性が、スーツに短いスカートを履いて龍一の前方を歩いていた。

自然と龍一の視線が、女性の下半身に落ちて行く。

スカートから伸びる美脚が綺麗だった。ヒップも形が良い。

いったい彼女は、どのようなパンツを履いているのだろうか。

やはり大人っぽいレースのパンツだろうか。

白だろうか、黒だろうか、それとも情熱の赤だろうか？

ノーパンなんて有り得ないだろうが、そんな変態だったらガツカリするな。

パンツは文化人の嗜みとして履くべき代物だと思う。

龍一は、そのような妄想を巡らせながら真っ直ぐに歩く。

女性は龍一が向う道とは別の方へと曲がっていた。

何故か名残惜しさを感じる。

今度は前方から自転車に乗った他高の女子生徒が走って来る。

短いスカートが、風に靡いて際どく揺れていた。

見えるか！

心で叫んだ龍一の姿勢が若干沈む。

さりげなく、出来るだけさりげなく、好奇心のままに行動する。

「ちっ、残念……」

見えなかった。

龍一とて年頃の高校生だ。異性に興味を抱く。

しかしここまで異性のパンツが気に成る事はなかった。

まだ龍一は、自分の中に芽生えた新たななる興味に気付いていない。

住宅街に入った隆一の周りから人氣が途絶える。

静かな住宅街では殆ど人とはすれ違わなかった為、再び超能力に付いて考え始めた。

一つ一つ自分が知りうる超能力のタイプを、潰して行くように試してみるしかないだろう。

それで自分の超能力が何か解るかもしれない。

自室に帰れば様々な超能力を記載した本が幾らでもある。

結局あれこれ悩んだ結果、自宅に到着するまでには何も回答が出なかった。

「まあ、あせる事はないよな」

そう言いながら龍一が玄関のノブを捻ろうとした瞬間、唐突にカシヤとカメラのシャッターを押したような音が聴こえた。

「ん?」

後ろを振り返る龍一。

誰も居ない。

なんだろうと思いい周囲を見ますが、これといって不審なところは見当たらない。

静かな住宅街。辺りの色が、夕焼けの為、オレンジ色に染まりかけていた。

いつもと変わらない近所が見えるだけで、歩いている人すら見当たらなかった。

「空耳かな」

気のせいだろうと、そう思った。

扉を開いて「ただいま」と声を張ると、キッチンの方から若い声で母が「おかえり」と明るく返して来た。

そのまま階段を駆け上った龍一は、自室で制服から私服に着替えるのと、ぎっしりと詰まった本棚の前に立つ。

「え」と、これとこれと……」

数冊の本を手にとると、ベッドに寝そべった。

どれもこれも幾度と読み返した超能力研究者の本である。

超能力を科学の目線から集録した本だ。

「参考になるだろう」

龍一は、夕食までの時間を、結局読書に費やした。

窓の外は、もう暗く成っていた。

時計の針は、七時を刺している。

二十分ぐらい前に姉も帰ってきた様子だった。

そろそろ父も帰宅する時間だろう。

「もう、こんな時間か」

もうじき夕食だろうと部屋を出て一階へと降りていく。

結局、自分の超能力が何かは解らなかつた。

冷たい姉と奇跡の母

龍一が部屋を出た直後、階段を駆け上がったように、一階からスパイシーを良い香りが鼻に届く。

「今日はカレーライスか」

龍一の母が作るカレーは実に美味しい。

スーパーなどで市販されている出来合いの固形ルーを使わずに、幾つものスパイスを混ぜ合わせて本格的なカレーを作るのだ。

作り方は、料理本で習ったものに、更なるアレンジを加えたオリジナルの一品らしい。

龍一の母は、基本的に何を料理しても美味しく作る。

結婚する前の夢が、料理師に成る事だったらしい。

「カーさん、ご飯まだあ」

階段を駆け下りた龍一が、そう言いながらリビングに入ると、テレビの前のソファには、雑誌を片手に持った姉の虎子が座っていた。

龍一がリビングに入って来ても顔すら上げない。

GパンにTシャツ。黒髪を腰まで伸ばしている。

家に居るとは随分とラフな格好をして居るが、入社時は堅苦しいレ

デイススーツに身を固めたガチガチの公務員だ。

短大を卒業後、市役所に勤めている。

性格はかなりキツイ。

「龍くくん。お父さんがまだだから、先にお風呂に入ってきたさい」

台所に立っていた母が振り返ると我が子に微笑みながら言った。

地味な服装にエプロン姿の母は、今年で39歳である。

19歳の時に姉の虎子を出産した。今の姉と同一年にだ。その二年後に龍一を儲けた。

しかし二児の母とは思えないほどに容姿は若々しい。

見た目には、20代後半にしか見えない。

近所の人には、奇跡の39歳と呼ばれているが、性格はおっとりで、時折じれったくもなる天然キャラだ。

母のつかさと姉の虎子は、歳にして20歳近くも離れているが、並んで歩けば姉妹にしか見えないのだ。

美形なのか化粧が上手いのかは龍一に判断できないが、顔もスタイルも綺麗で良く似ている。

だが、性格だけは似ても似つかない。

「ねーちゃんは、風呂入ったの？」

「入った」

ファッション雑誌を読む姉が、素っ気無く答える。

龍一は、なんだかしらけ気分でリビングを出た。

姉との会話は、ここ最近いつもこんな感じである。

昔は弟思いで龍一を可愛がり過ぎて苛めに成るぐらい構ってくれていたのに、いつの間にか冷め切った兄弟関係に成ってしまっている。

龍一は、バスルームの脱衣所で衣類を脱ぎながら、洗面所の鏡で顔や背中を確認するように眺めた。

「これといって変化は無いか……」

肉体の変化。

まさかと思うが念の為である。

アメコミのミュータントみたいに、容姿が変貌しては堪らない。

超能力者に幼い頃から憧れていたが、モンスターには成りたくない。

しかし鏡で見るからには、それは無いようだった。

全裸になって今一度全身を見回し確認する。

「異変は無いな……」

安堵した龍一は、洗濯機に手を掛けて足の裏も確認する。

確認が終わってから龍一は、自分がここまで心配性だったかと苦笑う。

ちよつと過敏に成りすぎていると反省した。

「それにしても俺の超能力って……。とりあえず風呂に漬かりながら考えるか」

そう呟いた龍一の視線が、手を掛けていた洗濯機の中に落ちた。

「ん……」

龍一の視線の先には、先に風呂に入った姉の物だろうか、それとも母の物だろうか、どちらの物が判らなかったが、女性物も下着が入っていた。

白いパンツである。

「……」

静かに固まる龍一。

洗濯機の中の下着を凝視する。

不思議なぐらい冷静だった。

まるで花瓶に活けられた花を觀賞しているような気分である。

頭の中から先程まで考えていた超能力の悩みが消え去っていた。

代わりに到来した思考は、止まらない程の好奇心であった。

「うむむ……」

自然と龍一の手は、洗濯機の中へと伸びていた。

温もりを失った白いパンツ。それをしっかりと掴んで拾い出す。

「使用後だよな……」

洗濯機の中に入っていたのだからそうだろう。

「これは……、この感情はなんだろう……」

自分でも戸惑いを感じていたが、好奇心がそれを上回る。動きは止まらない。

洗濯機の中から取り出した白いパンツを両手で持つと、眼前で広げ
る。

これが、いけない事だとは理解できていた。

これが、母か姉の物だとも解っていた。

これが、変態行為だとも……。

「へ、変態行為……」

その言葉を思い描いた瞬間、老婆の言葉を思い出す。

超能力と共に芽生えるもう一つの感情。新たなる趣味。

今何が自分に起きているかが理解できた。

自分に芽生えた新たなる趣味は、おそらくこれだろう。

思い当たる節もある。

今日の帰り道。女性とすれ違う度に、下着の事を考えていた。

間違いないだろう。

だからこそ、目が放せなかった。

パンツから。

刹那、扉が開く。

「龍〜。シャンプー切れてたから新しいの持ってきてやったわよ」

姉の虎子である。

新しいシャンプーを持った姉と、パンツを持った弟の視線が合う。

しかも、龍一は全裸であった。

硬直する二人。

空気も凍り付いていた。

「あ……、あんた……」

龍一の視線が、姉からパンツに戻る。

更に、自分が全裸であることも肉眼で股間を見て確認した。

「ねーちゃん、これには深いわけが……」

言い訳のしようがなかったが、やっぱり言い訳がしたい。

「それ……、私の……下着……」

「わざとじゃないんだ……」

当然ながら龍一の言い訳は、姉の耳に届かなかった。

姉の虎子が、弟の為に持って来た新しいシャンプーを床に落とす。
ゴトンと音が床で鳴る。

一方、弟の龍一は、新しく芽生えた趣味に力が籠もり姉のパンツを
落としもしなかった。
しっかりと持っている。

「おかーさーさーん！」

姉が叫びながら走り出した。

まずい！！

「違うんだ、ねーちゃん。話を聞いてくれ！」

龍一も走り出す。

全裸のままパスルームを飛び出して姉の後を追って廊下を走った。

自分が全裸である事を、再び忘れていた様子だった。

その時である。

「ただいまー」

玄関の扉が開いて父の源治が帰宅してきた。

「きゃああああああ、変態　　！」

「ねーちゃん、誤解だつてばー！」

「……………」

玄関で硬直する父、源治。

家族の為に今日も厳しい労働にせいを出し、残業を終えて帰宅してみれば、全裸の息子が両手で白いパンツを持ったまま姉を追いかけている光景だった。

家庭崩壊。

源治の脳裏に、その言葉が過ぎると片手から鞆が落ちた。

娘の悲鳴が、まだリビングから聴こえて来る。

「終わったな……」

政所家にはカレーの良い匂いだけが平和そうに広がっていた。

幼馴染はボーイッシュ（前編）

食卓に並ぶカレーライスとサラダの器を前にして龍一は、父の源治にこっつてりと絞られていた。

姉は弟を変態変態変態と連呼しながら二階の自室にひっこんでしまいい出て来ない。

こちらもかなり怒っていた。

姉の部屋に夕飯を運んだ母が、お盆を片手にリビングに戻って来た。

一通りの説教を怒鳴った父が落ち着くまでに30分近くの間時間が掛かった。

流石に龍一も凹んだ。

父の源治は、かなり硬派な性格だ。解り易く言えば、元ヤンである。

現在45歳。仕事は土木建築会社の事務職を務めているが、スーツを着た姿は身形を崩していないヤクザに見える程に凄みがある。

しかも右頬には、刃物で切られたような派手な古傷があるのだ。

尚更、堅気には見えない。

頬の古傷に関して父は訊いても語らないが、母曰く、父は若い頃から外見とは裏腹に真面目な性格だったらしい。

喧嘩もしない、博打も打たない、お酒は飲むが飲まれない。まして

や弱い者苛めなんか有り得ないとの事らしい。

少なくとも母の目には、そう映っていたようだ。

だが、父の若い頃の知り合いと言う人が、たまに家へと尋ねてくるが、どの人も強面である。

しかも殆どのお客が、吉本芸人でもないのに父のことを「兄さん」と呼ぶのである。

その事から父の若かりし時代に、どれ程のやんちゃを仕出かしていたかが推測できた。

間違いなく元ヤンキーである。

しかも、かなり格上のヤンキーだ。

だから父に怒られるのは、たまらなく怖い。

おそらく龍一は、一生父には逆らえないだろうと考えていた。

龍一にとって父親は、身近に在りながら最大の壁なのだろう。

しょんぼりと気を落とした龍一が食事を終えて自室に戻る。

階段を登る足が、とても重い。

まるで鉄球付きの足枷でも付けられた気分だった。

「ああ……、殺されるかと思った……」

眩きながらベットに倒れこむ龍一は、うつ伏せの体制で枕に顔を押し付けた。

まだ思考回路が恐怖でちじこまっている。超能力に付いて考える余裕が精神力として残っていなかった。

「もう駄目だ……、今日はもう寝よう……」

寝巻きに着替えようと龍一がベットから起き上がった時である。カーテンの閉められた窓が、外からノックされた。

「月美かな」

龍一がカーテンを開けると、窓ガラスの向こうに見なれた人物が直ぐ側に居た。

月美とは、隣の家に住んでいる幼馴染の女の子だ。

月美の部屋は龍一の部屋の向えにある。家と家がかなり接近している為に、屋根を伝って来れるのだ。

笑顔の月美が窓の外で手を振っていた。

髪はショートヘアに気の強そうな顔立ち。

白いTシャツに水色ノクトップを合せている。

下はひらひらとしたミニスカートを履いていた。

胸のサイズはほどほどだがスタイルは悪くない。
スレンダーで綺麗だと思う。

健康的な生脚が艶々していて魅力的だった。

歳は龍一と同じ年であるが、通う高校は違う。彼女は隣町の女子高に通っている。

龍一が窓の鍵を開けると、彼女の方から窓を開けて室内に上がりこんで来た。

「こんばんは、龍一ちゃん」

笑顔で挨拶をする月美は、屋根の上を渡ってくる際に履いていたサンダルを脱いで窓の外に下ろした。

窓枠を間にくの字になってサンダルを置く月美の仕草に龍一が、「よう、月美」と挨拶しながら身を屈める。

パンツが見えそうで見えなかった。

月美は龍一が気さくに話せる数少ない女子の一人である。

「月美、どうした？」

「どうしたは龍一ちゃんの方でしょう。虎ねちゃんも叔父さんもかなり怒ってたじゃない」

「いや、まあ……」

どもる龍一。バツの悪そうな顔をする。

おそらくは騒動と説教の大声が、隣の家まで届いていたのだろう。流石に恥ずかしい。

龍一がベットに腰を下ろすと月美は勉強机の椅子に腰掛けた。

「まあ、虎ねくちゃんが怒るのも分るわよ。可愛い弟がさ、まさか脱衣所で自分の下着を觀賞してれば幻滅の一つもしちゃうよね」

「そ、そこまで聞こえてたのか……」

更に肩を落とす。

椅子に座る月美は足を組むと、膝の上に肩肘を付いて顎を置いた。

それから少し怒った顔で言う。

「龍くちゃん、なんで虎ねくちゃんのパンツなんか手に取ったのよ？」

怒るように言う月美から俯いて顔を逸らす龍一は、大きな溜息を付いた。

父にも同じことを大声で問われたが、出来心としか答えを返せなかった。

昨日までは、室内に母や姉の下着が乾してあっても気にすらならなかった。

それが、あの婆さんに出会ってからだ。急にパンツが気になりだしたのは。

今も足を組む月美のスカートの奥が気に成っている。

正直、月美は可愛い。

今日は珍しく女性ぽい服装だが、普段は髪型も服装もボーイッシュなファッションを好む。

小さな頃は殆ど男の子に見えたが、高校に入学した頃から服装も徐々に女の子らしくなり、発育の遅れていたスタイルも女性らしく成って来ていた。

ボーイッシュキャラからお姉さんキャラに生まれ変わろうとしている節が見られた。

女子高でも一年の頃は王子様キャラで通っていたらしいが、最近は何月美お姉さまと後輩からは慕われているそう。

そのぐらい美形であることは間違いない。

「虎ねちゃんも、最近ますます美人に磨きが掛かってきてるけどさ。龍ちゃん、流石に身内のパンツ見て興奮てのはねえ。しかも洗濯機から取り出したところを見つかるとはねえ」

そうだ、タイミングが悪かったのだ。

いつも通り、姉の後、お風呂に入ろうとしたら、たまたま洗濯機に投げ込まれていた下着に目が落ち、思わず手に取ってしまい、そこ

を姉に見られてしまった。

そうだ。

たまたまが偶然の如く重なり合い、悪いタイミングを積み重ねるように生み出してしまったただけだ。

言い訳だが、己で己を正当化しなければ、死んでしまいそうな気分であった。

「反省している……？」

「してる……」

俯き、頂垂れて、力無く答える龍一。

なんとも寂しそうな顔を見せる龍一を心配したのか月美が眉を顰めた。

そして、椅子に座りながら組んでいた脚を解いて、今度は両膝を合わせるように両掌を乗せる。

恐縮した姿勢で月美が言った。

「そんなにパンツ……、見たい？」

「見たいと言いますが、なんと言いますか……」

「ちょっとなら、私が見せてあげようか……？」

「えッ！」

目を見開きながら瞬時に頭を上げる龍一とは裏腹に、月美は顔を赤らめながらそっぽを向いた。

照れている！？

だが、それが可愛い！！

幼馴染はボーイッシュ（後編）

「な、何言ってるんだよ、月美……」

龍一の言葉が震えていた。

動揺している。

生唾を飲んで喉を鳴らした。

「だってほら、私ばかり見ているのも悪いし……」

「……はあ？」

気恥ずかしそうに訳の分らない言葉を返した月美は、天井の隅っこを見詰めながら赤面していた。

沈黙。

硬直した龍一が、月見の顔を凝視する。

一方の月美は、沈黙に時折負けたのか龍一をチラ見するが、直ぐに視線を天井の隅に戻すを繰り返していた。

二つの疑問。

ボーイッシュな幼馴染の乙女が、突然自分のパンツを見せてあげると言うのだ。

願ったりな申し出であるが、何故にそのような事を言い出したのが分らない。

そして、その後に言った言葉。

自分だけ見ているのも悪い。

言葉の真意が不明である。

だが、しかし！

「パンツが……見たいです……」

消え去りそうな小声だったが、龍一の本意であった。

「誰の……、誰のパンツが見たいのよ？」

未だ天井の隅を見る月美が、自分の名前を言わせようと振ってくる。

誘われているのか？

それともおちよくられているのか？

畏か！？

釣られるままに月美の名前を口に出したら、「嘘に決まってるじゃない、龍くちゃんキモイ」。あはははははあはあくん」とか言われて馬鹿にされるのでは。

そのような疑いも想像できたが、すすくと育った健康美溢れ出る幼馴染の新鮮なパンツも凄く見たかった。

「ちよつとて……、今ここで？」

とりあえず質問で探りを入れる。

月美は細い首で、一度だけ頷いた。

「マジですかあゝ……」

思わず出た言葉に月美が「マジですよ……」と小声で返してくれた。

月美は幼馴染だ。小さい頃に、幾度となくパンツを見たし、何度も一緒にお風呂にも入った。

そう言う仲だ。

だが、それは子供の頃の話。過去の思い出に等しいし、その頃の月美を龍一は、男の子と思っていた。

彼女を女の子だと意識するようになってからは、裸どころかパンツすら見た事が無い。

そして、別に見たいとも思っていなかった。

しかしながら今は、見たい。

力一杯、見たいのだ。

懇願している。

ここは賭けに出るべきだろう。

例え賭けに負けても、ただ馬鹿にされるだけだ。

しかし賭けに勝てば、現役女子高生が身に付けたままの、生のおパ
ンツ様を拝めるのだ。

勝負に出ない理由が無いだろう。

「龍ちゃん、見る？」

龍一が打算的な思慮に励んでいると、月美が無垢に問う。

隙を突かれたような表情で龍一が、「うん」とハッキリとした抑揚
で答えた。

視線を決して合わせようとしない月美。

視線を月美の顔から外そうとしない龍一。

最近大人びて来たと感じていた幼馴染の表情が、随分と幼く見えた。

室内の温度が、少し上がったような気がした。

二人の顔が、一段と赤く熱る。

黙ったまま椅子から立ち上がった月美が、ベットに腰を下ろしてい

る龍一の前にゆっくりとした足取りで歩み寄った。

龍一の眼前で、月美のミニスカートが揺れていた。

細い体をモジモジさせている。

控えめな膨らみを見せる胸の前で、両手の指を落ち着き無く絡ませていた。

月美の全身の肌が、桜色に染まっている。

「ちょっとだけなんだからね……」

構わない、ちょっとでいいから見たかった。

龍一の目が血走る。

期待に心が膨らみ、若さで別の場所も膨らむ。

しかし、モジモジタイムがじれったく続いた。

待ちきれなくなった龍一が、幼馴染の表情を窺おうと上を向く。

一瞬だけ二人の視線が合ったが、素早く月美が視線を逸らす。

顔は真っ赤だった。

とても龍一を騙そうとしている様子ではないし、演技とも思えなかった。

それを察した龍一の期待が、更に膨らんだ。

畏じゃない。

確信できた。

ならば待とうと決心する龍一。

決心が付かないのは月美の方に見えた。

言ったはいいが、なかなかパンツを見せようと動けない様子だった。

だが、その恥じらいが甘美なまでの蕩けるような空気を漂わせる。

黙り込む二人。

静かな部屋に、時計の秒針が刻む音だけが聴こえて来る。

下唇を噛む月美。

龍一が幼馴染の顔を見つめていると、月美の両手がついにゆっくりと動き出した。

その動きに龍一の視線が下に戻る。

待っていましたと心が躍る。

月美が両手の細指で、自分のミニスカートの裾を摘まんだ。

龍一の鼻息が荒くなり、時計の微音を掻き消す。

心臓の弾む音が、直接鼓膜に届いて邪魔くさい。

「と、特別なんだからね……」

言葉と共に月美のミニスカートの裾が、少しずつ上昇して行く。

綺麗な生足が、少しずつ見える量を増やして行く。

秘密の花園を隠すカーテンが徐々に幕を上げる。

目が放せない。

逸らせない。

瞬きすら忘れてしまう。

龍一の双眸が、異常なほど赤くなっていた。鼻血も出そうである。

刹那。

「おおっ！」

見えた。

少し見えた。

よく判らないが、僅かに見えた。

更に露出は増えて行く。

白！

否。

青い横しま！

シマパン！

ナイス、ボーイッシュ！

全部ではないが、間違いなく見えた。

「ここまで！」

静かだった部屋に張りのある月美の音が響くと同時にミニスカートの裾が下ろされた。

「もうちょっと！」

いきなりポリウムを上げた月美の声に釣られて龍一も大きな声を上げてしまった。

「だーめ！」

そう言って、あっかんべーと舌を出した月美が、踵を返して入って来た窓へと動く。

ベッドから腰を浮かせた龍一が、片手を伸ばすが届かない。

敏捷に窓の外へ出た月美が、上半身だけを反して手を振った。

いつものように微笑んでいた

明るく。

元気良く。

そして、優しく。

「おやすみ、龍ちゃん」

その言葉を最後に月美は、自分の部屋に窓から入りカーテンを閉めてしまう。

その間一度も月美は、振り返らなかった。

おやすみの言葉すか返せなかった龍一は、ただ呆けながら幼馴染が消えた部屋の明かりを眺めていた。

その光も直ぐに消える。

龍一の部屋に、静けさだけが残った。

「俺も寝ようかな……」

そう言い部屋の電気を消すと、ベットに潜り込む。

幼馴染がプレゼントしてくれた青春の記憶が、龍一の脳裏に鮮明に焼きついていた。

ベットの中で瞼を閉じても消える事無く浮かんで来る。

今晚の宝だ。

良い夢が見れそうだった。

「久々に、自家発電しようかな……」

こうして少年が歩む、新たな人生の一日目が終了した。

登校小話

早朝。

龍一が両親と朝食を取っていると、二階から早足で降りて来た姉の虎子が、何も言わずにリビングを横切り玄関に向う。

母がおはよしの挨拶を掛けたが姉はそれすら無視して家を出て行った

今日は平日だしスーツを着ていたから、出社したのだろう。

姉の様子からして、まだ昨日の事を怒っているようだった。

当然だ。一日で忘れろってのが無理がある。

食事を終えた父が席を立つと、ネクタイを締めながら息子に言った。

「龍一、虎子が帰ったら、もう一度謝っておけ」

ドスの効いた声は、まるで脅しのような響きがあった。

食事の箸を止めた龍一が、俯き加減で「うん……」と答える。

父に言われるまでもなかった。龍一も朝一で姉に再度謝る積りだった。

だが姉の虎子は、避けるように家を出て行ったのである。

龍一の心は、罪悪感をチクチクと感じていた。

やがて強面の父も会社に出社する為に玄関を出て行く。
それを母が家の外まで見送った。

父と母は仲が良い。

結婚して20年が過ぎたが、新婚気取りで腕を組み寄り添っている
シーンをちよくちよく見る。

近所でも評判なぐらいだ。

まさに美女と野獣と言つか、美女と極道である。

「ごちそうさま」

龍一も食事を終えて席を立つ。

そろそろ学校に行く時間だ。一度二階の自室に戻って鞆を取ってか
ら玄関を目指した。

龍一が玄関で靴を履いていると母がいつものよう弁当箱を持ってき
てくれた。

「はい、お弁当」

「ありがとう、かーさん」

龍一が受け取った弁当箱を鞆に入れてみると、更に母が何かを差し
出す。

「龍ちゃん、これで我慢してね……」

いつも微笑みを欠かさない母の顔が、眉毛だけをハの字に歪めていた。

母が差し出した物に龍一が視線を落とすと、それは二つ折りにされたレースのハンカチだった。

三角形に折られたレースのハンカチは、まるで女性物の下着にも見えた。

「か、かーさん……」

龍一が、こまつたような顔で母を見る。だが手は二つ折りのハンカチに伸びていた。ガツシリと鷲掴む。

「かーさん……、ありがとう！」

龍一の眼に涙が滲む。

母のつかさは優しく微笑んでいた。

まさに女神である。

流石は奇跡の39歳である。

三角に折られたレースのハンカチをポケットに捻じ込んだ龍一は、「かーさん、これを励みに今日も頑張るよ！」と心の中で感謝しながら家を出て行く。

憂鬱だった龍一の心が、大分癒された想いだった。

「おはよー、龍ちゃん」

玄関を出ると、家の前で月美が立っていた。明るい挨拶が飛んで来る。

龍一が幼馴染に「おはよー、月美」と挨拶を返すと二人は、駅の方へと並んで歩き出す。

朝、学校に登校する際に二人は、いつも駅前まで一緒に向う。

そこから月美は電車に乗って隣町に在る女子高に向かい、龍一は入れ替わりで電車から降りて来る親友の卓巳と合流して、一緒に歩いて学校へと向うのである。

幼馴染と並んで登校。

通う学校は別々に成ってしまったが、この生活習慣は幼稚園の頃から変わっていない。

龍一が、隣を歩く月美をチラリと見た。

ボーイッシュな幼馴染は、健康的にスレンダーなスタイルで、女子高の可憐な制服を見事に着こなしていた。

短いスカートが揺れるたびに昨日の晩の事を思い出す。

龍一がシマパンの事を思い出してにやついて居ると、いきなり月美が「ねー、龍ちゃん」と話しかけて来た。

ドキリとした龍一が、必死に真顔を作ってから「なに？」と返す。

「流石は叔母さん。凄く龍ちゃんの気持ちを理解しているわね」

「なにが？」

龍一が不思議そうに問うと、月美が龍一のポケットを「これよこれ」と言いながら突っついた。そこにはレースのハンカチが入っている。

「見てたのかよ!？」

「玄関の隙間から見えたよ」

月美が揶揄する目付きで言う。

戸惑いながらも龍一は、玄関が開いていたのだろうかと疑問に思ったが、見られていたことには変わらないと肩を落とす。

また月美に恥ずかしいところを見られてしまったと情けなく成り憚然と沈む。

「龍ちゃん、そんなにパンツが好きなの？」

「好きと言いますか……、なんと言いますか……」

気恥ずかしさに小さくなる龍一に対して月美が、何故か勝ち誇った口調で言う。

「まあ、龍ちゃんも、年頃の男だしね。そう言うのに興味を抱いても仕方ないか」

「うるせよ……」

龍一が、不貞腐れるように口を尖らせる。

それが月美には可愛く見えたのか、今までと違う優しい表情に変わった。

「じゃあさ、また今度、私が見せてあげようか？」

「マジ!？」

龍一が素早い動きで幼馴染の顔を見ると、月美は逆の方を向いて表情を隠してしまう。

しかし、ショートヘアから覗く小さな耳が、真っ赤になっていた。

「た、たまにだったら……、いいよ」

「マジですか!？」

「マ、マジですよ……」

完璧に照れている。

だが、可愛い!

心の中で「よし!」と叫びながら龍一は両手で小さなガッツポーズ

を取っていた。

「その代わり、虎ねくちゃんのパンツなんか、もう取っちゃ駄目なんだからね……」

そつぽを向いたままの月美の言葉は、なんとなく交換条件にも聞こえたが、そんなの龍一には関係なかった。

なんの問題もなく女の子のパンツが拝めるのだ。歓喜な話である。

「わ、わかったよ、月美。もう虎ねくちゃんのパンツには、手を出さない……」

龍一が常識的な事を誓う。

「見るのも駄目なんだからね」

「わかったよ、見ない……」

月美が上目使いで龍一を見ながら言う。

「例え脱衣所に落ちてても、見ちゃ駄目なんだよ」

「うん……、絶対に見ない」

少し考えてから答える龍一。

「洗濯場に乾してあっても見ちゃ駄目なんだぞ」

「思わず目に入った……、とかも駄目？」

「駄目！」

月美の目が怒っている。

釘を刺さず月美の声色には、嫉妬の色が窺えた。

「じゃあ……、どうしてもパンツが見たくなったら……？」

「幼馴染なんだから私に言いなさいよ！ ちよつとだけなら見せてあげるって言うてるでしょ！ 龍くちゃんが見ていいパンツは、私のパンツだけなの！」

「月美、そんなに怒るなよ……」

ここまで興奮して怒る月美も珍しい。

でも、怒る姿も可愛かった。

「じゃあさ、月美」

「なによ？」

月美は少し冷静になってから返事を返した。

「今、ちよつとでいいから、ここでパンツを見せてよ？」

「!？」

立ち止まる月美。

龍一のお願いに月美の顔が、下から上へと一瞬で赤くなってしまう。

目が点と成り、頭のとっぺんから湯気を上げて固まっていた。

「駄目か、月美、パンツ!？」

力を込めて訊く龍一。

戸惑う月美。

小動物のような眼差しで懇願する幼馴染の前で月美は、「ち、ちょっと、なに急に言ってるのよ。ここは外なにさ。ちよっとだけならパンツぐらい見せてあげるけど、外は駄目よ。だって他の人に見られるし、幾らなんでもそれは恥ずかしいし。龍ちゃんにパンツ見せるのだって本当は凄く恥ずかしいんだからね。それを、こんなところでパンツを見せるだなんてさ。駄目って訳じゃないけれど、急すぎて心の準備が付かないよ。私だって女の子なんだよ。龍ちゃんにパンツぐらい見られるのは我慢できるけど、他の人にパンツを見られるのは絶対に駄目なんだから。そもそも龍ちゃんは、パンツを見せるのがどれだけ恥ずかしいか分ってるの。私はパンツぐらいって言ってるけど、真に受けないでよね。本当はすっごく恥ずかしいんだからね!」と、キンキンと声をあげながら、あたふたと両手をバタつかせていた。

照れる月美の様子も可愛くいつまでも眺めていたい。

しかし、パンツも見たい。

その為か、ついつい急かす言葉を龍一が言ってしまった。

「月美、お願い、パンツを、パンツを見せてくれ！」

一層力が入っていた。

声も大きくなっている。

拝み倒すように頭を下げる龍一の眼前で、月美が赤面の色を更に濃くしてうるたえる。

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと龍くちゃん!？」

「頼む月美、パンツを、パ、ン、ツ、を、見せてくれ!!」

畳み込むように訊く龍一も必死だった。

月美が首を振って辺りを見回せば、数人の歩行者が二人を見ていた。

いつの間にか二人は、駅に近い大通りまで出ていたのだ。

歩行者達の視線が月美に突き刺さる。

好奇心の眼差し、失笑を堪える眼差し、軽蔑の眼差し、様々な視線に月美が気付いた。

離れた場所からこそそと話す他高の女子生徒が、「あのカップル、朝からパンツパンツって馬鹿じゃないの」と話す声が微かに届く。

プルプルと震えだす月美。

「りゅ、龍ちゃん馬鹿！！」

叫んだ月美が、拝みながら頭を下げている龍一の後頭部に平手を落としてバシンと叩いた。

そして大声で、「わああああああ」と泣きながら物凄いスピードで走り出す。

あっという間に月美の姿は駅の方へと消えて行った。

一人残された龍一も、頭を上げてから辺りの様子に気付いて赤面した。

逃げるようその場を後にする。

龍一が駅前に着くと、いつものように待ち合わせをしている卓巳が駆け寄って来た。

「おい、龍」

「お、おはよう、卓巳」

卓巳の表情は、険しかった。

「おはようじゃあねえよ、龍。さっき大声上げながら月美ちゃんが走っていたぞ……。何か有ったのか？」

「いや、ちょっとした喧嘩みたいなもんだよ……」

「喧嘩……、大丈夫か？」

「大丈夫だと思う。悪いのはきつと俺だ。夜にでも月美に謝るよ…」

長身の親友は、金髪の髪を掻きながら心配そうな表情で言う。

「そうした方がいいぞ、龍。お前は女にモテない甲斐性無しだからよ、月美ちゃんに愛想を尽かされたら一生結婚すら出来ない童貞野郎で終わっちゃうぞ。だから絶対に謝れよ、絶対だぞ」

念には念を押された。

「親友とは言え、凄い言いようだな。……まあ、当たっているようなもんだが……」

「それはそうと、龍。何していたんだよ、いつもの時間よりもかなり送れて来やがって」

卓巳が携帯電話を取り出し時間を見せる。

「このままじゃあ遅刻だ。走るぞ！」

そう言うと卓巳が走り出した。

何をしていたかを明確に説明しなかった龍一は、何も言い返さずに、走り出した親友の後を無言で追う。

学校には、ぎりぎり間に合ったが、これで今晚中に謝らなければならぬ女性が二人に増えた事になる。

姉の虎子と幼馴染の月美にだ。

気が重くなるが、これも皆、自分の責任だ。

頑張って謝罪しようと思う龍一であった。

遅刻寸前のハプニング

幼馴染に対して、路上で認めも憚らずにパンツを見せてくれと懇願したが為に、親友を道連れに駅から学校までの三キロ程をランニングするはめに成った龍一は、廊下で担任の女教師を追い抜いて教室に飛び込んだ。

龍一と卓巳の仲良しコンビに遅れて教室へと入って来た担任女教師まなみ先生26歳が、やる気の薄い怒りかたで「お前ら、廊下を走っちゃ駄目だぞ」と二人を注意するが、二人は適当に聞き流して自分たちの席に急ぐ。

担任女教師まなみ先生は、サバサバとしたお姉さんタイプの先生である。

いつもジャージ姿でてきぱきと動く彼女は、気の強そうな口調で生徒や他の教師と接し、男ぽい面も多いがやたらと面倒見が良い出来た教師である。

よく見れば薄化粧を欠かさない女らしいところも掛け備えており、人当たりだけでなく容姿も運動神経も申し分なく、男女問わず生徒全般に人気が高い。

だが、独身である。

「ん？」

まなみ先生が教室に入ると、床に何か不自然な物が落ちているのを発見する。

「なんだ、これ？」

短めのポニーテールを揺らしながらまなみ先生が、それを拾い上げた。

それとは、龍一の持ち物であるレースのハンカチだった。

慌てて教室に飛び込んだ時に、思わずポケットから落としてしまった物だ。

「誰だ、教室にパンティー落としたのは？」

三角に折られたレースのハンカチを拾い上げたまなみ先生が、ヒラヒラと振って生徒全員に見せる。

「女子諸君、ちゃんとは履いているか？ 私はちゃんと履いているぞ」

本物のパンツに見えた男子生徒達が双眸を見開き「おお！」と猛りながら凝視するなか、女子生徒達がザワザワとどよめき自分の股間をスカートの上からさすって確認を取る。

女子生徒のAさんが言う。

「まなみ先生。それ、ハンカチですよ……」

「あ、本当だ。私はてっきりパンティーかと思ったよ。つまらん、ハンカチか」

女子生徒達が安堵に胸をなでるなか、男子生徒達はがっかりと落胆して見せる。

「そのハンカチ、さっき政所君が落としましたよ」

龍一が落とすところを見ていたのだろうか、一人の女子生徒が報告する。

その生徒とは、いつも龍一が気を引こうと不順なテレパシーを飛ばしている憧れの女子であった。

隣の列の四つ前に座っている彼女の名前は、しかぬま鹿沼 ひすい翡翠。

龍一が密かに思いを寄せている彼女は、容姿端麗頭脳明晰であるが、運動神経は零に等しいおっとり系である。天然な素振りも多い。

性格は素晴らしく良い子である。ハグしたら一生離れたなくなる程に可愛く、一つ一つの動作が可憐で育ちの良さをフェロモンと一緒に放出しているぐらいであった。

腰まで在る長い黒髪が、とても魅力的で、胸も大きい方である。

正直なところ結婚したい。もちろん将来的な希望である。

しかし、当然ながらライバルは無数である。

鹿沼翡翠は、校内全体の可愛い女子生徒ランキングで一年生の頃からベスト10内にランクインしている。

蓬松高校に通う男子生徒の多くがお墨付きを与えるほどの美少女なのだ。

「なんだ、政所。お前のハンカチか？」

まなみ先生がレースのハンカチを突き出しながら言う。

「男子が持ち歩くようなハンカチじゃないな。お前は、こつこつのが好きなのか？」

まなみ先生も意外だなと言いたげな顔をしていた。

「それは！」

慌てて席を立つた龍一が走ってハンカチを取りに行く。

焦って足が纏れながらも答える。

「母のハンカチを間違えて持ってきたんです！」

手に持ったハンカチを乱暴に奪われたまなみ先生は「そうか、つまらんな」と言うと主席簿を開いて朝の儀式を開始する。
何がつまらないのかは不明であった。

ハンカチをポケットに捻じ込みながら龍一は、恥ずかしそうに自分の席に着いた。

帰り道で鹿沼翡翠と目が合った。彼女は軟らかく微笑んでいたが、龍一は思わず顔を背けてしまう。とても恥ずかしかったのだ。

「よりによって、何でだよ……」

呟きで愚痴る龍一。鹿沼翡翠に見られた事が悔いに成る。

ほんのちょっとした出来事であったが、甘酸っぱい思い出として龍一の記憶に青春として刻まれた。

傷は浅い。

忘れよう。

この程度のハプニングならば皆もが直ぐに忘れてくれるだろうと思っただ。

しかし世間は許さない。

今後このネタは、しばらく尾を引く事に成るのであった。

政所龍一が母のパンティーをハンカチ代わりに使っていると、謝った噂が学年内に広まるので、僅か一日と掛からなかったのである。

昼休みの噂話

昼休みの事である。

龍一が卓巳と机を向かい合わせて弁当を食べていると、隣のクラスの男子生徒が教室に入ってきて、二人に話かけてくる。

「な、な、龍」

彼の名前は鶴岡つるおが 又吉またよし。

お調子者で、誰にでも賑やかな口調で話しかける軽い男である。

髪を少し茶色く染めているが、本人は卓巳のように、もっと金髪に染めたいらしい。

しかし、その願いが叶わない事を、龍一と卓巳は知っていた。

又吉の家柄は古くから名門で有名な茶道の流派らしい。本来ならば茶髪すら許されない程に厳しい家柄なのだ。

だが、堅苦しい家に生まれ育ったわりには、又吉の性格はなんとも柔軟である。人当たりは軽すぎる程に馴れ馴れしい。

そんな又吉も家に帰れば、厳格な家族やセレブな客人に囲まれ、猫を被りながらお茶をたてている。

想像しただけで笑ってしまいそんな光景である。

「な、な、知っているか、ミスターオカルト」

「ん、何、又吉？」

弁当を食べ終えた龍一が、片付けをしながら返事を返す。

一緒に食事を取っていた卓巳も、もう少しで食べ終わりそうだ。

「ミスターオカルト、面白い噂話を仕入れたぜ。どうだい買わないか？」

龍一は又吉に、しばしばミスターオカルトと呼ばれる事があるが、あまり気にしていない。

又吉が、こう呼びながら近寄ってくる際は、大概がオカルト話をしたい時である。

買わないかと振ってくるが、実際に売り買いを行った事は無い。

「どんな噂話だ？ この前みたいないくらならぬ都市伝説は厭きたからな」

この前の噂話とは、こうであった。

町に化け物じみた怪人が現れ悪さを働くと、バイクに乗った仮面の男が登場して退治すると言った噂話である。

この都市伝説は、昭和47年ぐらいから噂されるようになった話で、最近では都市伝説の一つとしてインターネット上でも多く語られている。

怪人は、人間を外れた外見をしており、人間の遺伝子に、まったく別の生き物を足したような化け物で、中には機械と融合した者も居

ると云われている。

そのような怪人が、何処からともなく表れて、人を浚ったり殺したりするらしい。

時には世界征服を目論み、秘密結社として影で暗躍しているとも噂されている。

オカルトに興味を持っている人物ならば一度くらいは聞いたことがある都市伝説だが、逸脱した内容のせいで信憑性は低い。

「いやいや、今回の話は、もっと身近な話だぜ」

又吉はオカルト話が好きな訳ではない。基本的に情報が好きなのだ。いろいろな人といろいろな情報を交換して、更なる情報を手に入れる。そうやって人間関係を広げて行きながら知識を収集するのが好きなのだ。

生まれ付いての情報屋みたいな男である。

そして又吉が話をわざわざ龍一のところを持つて来る理由は、自分が持ち込むオカルト話の信憑性を確かめ、その上でうんちくを学びたいからである。

ただの噂話も、それなりの知識が有る人物の意見を取り入れれば、一段と面白い話になるからだ。

又吉の中で、自分が知る人物では政所龍一が一番のオカルト研究家なのだ。

龍一の意見を取り入れたオカルト話ならば、この後に同じ話を聞かせる相手の反応が、大きく違ってくる事を又吉は知っていた。

良い情報で、内容が詳細な物ならば、相手の受けが良いのだ。

龍一も又吉が持ってくる噂話には、感謝している。

自分は女の子と話のが苦手である。身内や月美以外の女の子と話すと、直ぐにどもってしまふ。

だから女の子が好むような噂話や都市伝説の類は、いつも又吉が運んでくるのである。

彼の持ち込むスピードは、時にネットよりも早い時があるからだ。

「身近ってなんだ？」

又吉に訊いたのは、弁当の蓋を閉めたばかりの卓巳だった。

それに又吉が答える。

「パンドラ爺婆の噂だよ」

「パンドラ……」

又吉の話に龍一は、先日自分が出会った老婆の顔を思い出す。

自分に超能力をプレゼントしてくれた老人だが、未だどのような超能力が備わったかは不明である。

「ハンドラじじばば？ パンドラって言ったら、108の災いが入っていたって言うパンドラの箱の……あれだろ？」

卓巳の質問に、今度は龍一が答えた。

「ギリシヤ神話だよ。」

プロメテウスが天界から火を盗み、人間に与えてしまった事を怒ったゼウスが、他の神々に命じて『女性』を作らせた。肉体を泥から作られ、男性を苦悩に追い込む我が儘な魅力と、獣のような恥知らずな心を与えられた女性。それがパンドラだよ」

「ほうほう」

「パンドラって泥なんかい……」

卓巳と又吉が、淡々と語る龍一のうんちくに耳を傾ける。

「そしてゼウスはパンドラに一つの壺を持たせると、プロメテウスに彼女を贈り物だとしてプレゼントするんだ」

「壺？ 箱じゃないのかよ」

又吉が訊くが、龍一は首を横に振ってから答える。

「今ではパンドラの箱として有名だけど、この話が一般に広まる前の古い書物では、壺と書かれている事が多かったんだ。それが世間に広まる途中で、箱としての方が有名的に広まったんだよ。実際は、箱なのか壺なのか、どっちが正しいかは僕にも解らないけどね」

今度は卓巳が言う。

「で、確か、その道中でパンドラちゃんか、好奇心に負けて箱か壺だかの蓋を開けて、世界に108種の災いが広まるんだよな」

「大まかには、そうだけだね。もっと細かく言うならば、プロメテウスはゼウスの贈り物を拒んだんだけど、弟のエピメテウスがパンドラの美しさに引かれて結婚してしまうんだ。その後、パンドラが蓋を開けてしまう。彼女は、災いを世界にばらまく為だけに生み出された女性なんだ」

「パンドラちゃんって、既婚者だったのか……」

そこまで説明した後に龍一が、「それでパンドラ爺婆ってなんだよ？」と、問う。

「なんでも一年前ぐらいから、急速に浮上し始めた噂話で、まだネット上にも揚がっていない話なんだけどな」

又吉の顔は、無邪気に笑っていた。

「この素度夢町と、隣の後母等町に出没する怪人らしいんだ」

「怪人……」

怪人と云われ龍一が、眉間に皺を寄せた。

確かに超能力をプレゼントしてくれると言う点では、怪人かもしれないが、自分が行き当たった老婆は、水晶を前にした占い師風だった。怪人と呼ぶほどに奇怪でもなかったと思う。

それに爺婆って事は、爺さんと婆さんの二人と言っ事だろう。
それも龍一の体験と異なる。
自分の場合は、老婆しか居なかった。

「なんでもよ、そのパンドラ爺婆ってのに出会つと、超能力が貰えるらしい」

そこは、龍一の体験と類似している。

ただ、本当に自分に超能力が備わつたかは不明だが……。

「それで、そのパンドラ爺婆ってのは、二人居るのか？」

卓巳が問う。

龍一は、ナイスと思う。そこも知りたい疑問の一つだった。

「ああ、二人居るらしい。爺の方が、後母等町に出没するらしく、婆がこの素度夢町に現れるらしいんだ」

「じゃあ、婆は、この町に居るんだな。何処に行けば、会えるんだ？」

卓巳の質問に、それは分らない、と又吉が答えた。

俯いて考え込む龍一。

やはり龍一の出会つた老婆は、その婆の方だ。

この噂は、本物だ。

「龍、聞いたか。超能力が貰えるんだってよ。本当ならスゲーな。俺等も貰いに行くか？」

冗談混じりに言う卓巳は、話の根本を信じていない様子だった。

もともと卓巳は、超能力や幽霊などの類は信じててない。しかし、否定もしていない。オカルト現象が、存在しようがしまいが関係ないと考えていた。

だからオカルト好きの龍一とも親友関係が築けている。

「でも、この話には、まだ後があるんだよ」

語る又吉の顔に、怪しげな影が掛かり不気味な口調に変わる。

「なんでもよ、パンドラ爺婆に出会って超能力が貰えるけど、その代わりに人格まだ変貌するらしいぜ……」

「人格が変わってなんだよ？」

質問を反す卓巳の横で、龍一の顔が曇る。

龍一の脳裏に、新しい趣味と言う老婆の台詞が流れた後に、ドラゴンが運んで来たパンツの雨が思い浮かんだ。

そして更に又吉が怪しさを深めながら言う。

「パンドラ爺婆に、超能力を貰った人間は、その後、殺人鬼に変貌するらしいぜ」

殺人鬼！

龍一の背筋が一瞬伸びた。

「殺人鬼に成るって、どう言う事だよ？」

「ほら、三ヶ月ぐらい前に、C組みの江田島って奴が、暴力事件で退学させられただろ」

覚えている。確か、自分の父親をバットで殴りつけて病院送りにした事件だ。

ニュースにも成った。

バットで殴られた父親は、一命を取り留めたらしいが、死んでても可笑しくない重症だったらしい。

「あいつが事件を起こす数日前に、変な婆に出会ったとか言ってたらしい。その話の裏は、クラスメートから俺自身が取ってるから間違いない」

「マジか！？」

「それだけじゃないぜ。一年の女の子が、一ヶ月前から失踪しているんだが、彼女も後母等町で変な爺に出会ったて、周辺に語っていたらしい。」

確認こそ取れていないが、別の学校でも、似たような話が上がっているとか……」

最後に間を置いた又吉が、神妙な顔を作りながら考え込んでいる龍

「一に、「どう思う、ミスターオカルトは？」と訊いた。

少し考えてから龍一が答えた。

「今のところ情報が少なすぎるし、良くある厨二臭い話だ。

「C組の男子生徒の暴力事件や、一年の女の子が失踪した事件とも、因果関係がなさすぎる。失踪と暴力事件では、一緒に出来ないし、まだ誰も死んでないんだらう。殺人鬼って言うてもな……」

自分が殺人鬼に成ってしまうのかと、不安が過ぎつた。

だから、否定気味の意見に成ってしまう。

「現段階では詳細の意見は述べられないけれど……」

「けど？」

「身近で、この町と隣町で起きている事件ならば、まだ調べようがあるかもしれないね。手の届く範囲内の事件、そこに興味が持てるよ」

興味どころの話ではない。真相を見極めたい。

「なるほど……」

今度は又吉が考え込む。

龍一の意見は、遠回しだが自分に調査しろと言っているようなものだったからだ。

「分かった、もうちょっと情報が集まったら出直すよ」

そう言って踵を返そうとした又吉を龍一が、「ちょっと待った」と呼び止める。

「調べる気があるなら、調査内容をリクエストしていいかな？」

カッと、又吉の顔が明るくなる。

「何だい？」

「パンドラ爺婆も気に成るが、その老人達と出会った生き証人を探してくれ。あと本当に超能力を貰えるなら、どんな超能力を貰えたかだ」

「龍く、否、ミスターオカルト。僕を舐めているのかい。そんなの君に言われなくても心得ているよ。僕の夢は茶道の家元を継ぐ事じゃない、探偵小説などに出てくる情報屋に成る事だ。夢はハードボイルドの脇役だぜ。任せておきな」

「もっといい夢を持つて……」

ミュージシャンを夢見る卓巳が、心配そうに又吉を見た。

だが、ご機嫌で又吉は踵を返すと教室を出て行った。

新たな情報を求めにだ。

しかし、誰も気付いていなかった。

クラスメートもだ。

三人が、オカルトチックな会話を繰り広げている間、龍一の席の隣の列、四つ前の席で昼食を終えた鹿沼翡翠が、読書をするふりをして、三人の会話を熱心に盗み聞きしていた事を。

「あら、翡翠。読んでる本が逆だよ……。あんたそれで本が読めるの？」

逆さまに持った本を読んでいる翡翠に気付いたクラスメートが訊くと「あ、本当だ！」と惚けてみせる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845y/>

変態超能力をプレゼント

2011年12月11日19時52分発行